

論文の内容の要旨

論文題目 非主流の後期中等教育機関における学校適応・進路形成のメカニズム
—高等専修学校の事例研究を軸とした検討—

氏 名 伊 藤 秀 樹

本研究の目的は、非主流の後期中等教育機関を対象とし、生徒の学校適応・進路形成を支える教育実践・背景要因と、そうした教育実践のもとで新たに増えてくる困難を描き出すことであった。

定時制高校・通信制高校・高等専修学校・サポート校などの非主流の後期中等教育機関は、学業不振・不登校・高校中退などの事情を抱え、全日制高校への進学（・転編入）が難しい者を、後期中等教育上で受け入れる場となってきた。しかし同時に、これらの非主流の後期中等教育機関では、生徒の学校適応・進路形成にまつわる課題が集積する傾向にあり、生徒を卒業まで導き社会的自立へと水路づける過程ではさまざまな困難が想定された。非主流の後期中等教育機関では、生徒たちの学校適応・進路形成をいかなる教育実践や背景要因によって支えることができるのだろうか。また、生徒たちの学校適応・進路形成を支えようとする教育実践のもとで、同時に生じる困難とはどのようなものだろうか。

本研究ではそうした問題関心から、まず非主流の後期中等教育機関におけるそれぞれの学校種・形態の特徴と、入学してくる生徒層、中退率・進路未決定率の現状などについて述べた後（第2章・第3章）、事例研究に着手した（第4章～第8章）。具体的には、高等専修学校であるY校を事例とし、事例と調査の概要について記述した後（第4章）、生徒の学校適応の側面として「不登校経験者の登校継続（第5章）」「教師の指導の受容（第6章）」、進路形成の側面として「進路決定（第7章）」「卒業後の就業・就学継続（第8章）」を取り上げ、そのメカニズムと同時に生じうる課題について検討した。

第2章では、全日制高校以外の後期中等教育機関を概観したうえで、非主流の後期中等教育機関における「受け入れる生徒層」「カリキュラム編成」「中退率・進路未決定率」について、学校種間・学校種内でみられる共通点と相違点を整理した。

まず、生徒層については、各学校種で不登校経験者、高校中退（・転編入）経験者、学業不振の生徒、非行傾向がある生徒、発達障害がある生徒、外国にルーツをもつ生徒、社会経済的困難を抱えた家庭に育つ生徒などをほぼ共通して受け入れる傾向にあることを示した。しかし、別の学校からの転編入や非行傾向をもつ生徒の受け入れなどの方針の違いなどにより、それぞれの学校・教育施設で受け入れる生徒層には「微妙なコントラスト」が生じていることも見出した。また、カリキュラム編成については、学校種間・学校種内で登校日数・授業時間・授業内容が非常に多様であることを指摘した。中退率・進路未決定率については、全体としては全日制高校よりも高いかもしれないが、非主流の後期中等教育機関のなかでも、学校種間・学校種内で差異が見られることを示した。

第3章では、第2章で指摘した生徒層の「微妙なコントラスト」に着目し、非主流の後期中等教育機関への入学者選抜がどのようなものであり、結果としてどのような生徒層が

入学機会における不利を受けているのかについて、東京都を事例として検証を行った。

東京都では、非主流の後期中等教育機関の入学選抜において、学業達成の水準が実質的には選抜基準となっていない学校・教育施設も多かった。一方で、学業達成の他に重要な選抜基準となりうるものとして、「家庭の経済的状況」「家庭の教育への姿勢」「素行の改善可能性」という3つの要因が見出せた。これらの知見からは、非主流の後期中等教育機関のカリキュラム編成が多様化しているにもかかわらず、家庭背景や素行というノンメリトクラティックな選抜基準によって進学先の選択肢が狭まり、不本意な進学へと水路づけられる者たちがいることが示唆された。そして、その不本意な進学が、学びのスタイルの変更を伴うものであり、また中退率の高い学校への進学になっているという様子も浮かび上がった。

第4章では、Y校という事例の紹介と、調査の概要についての説明を行った。具体的には、まずY校の概要について学校資料などをもとに提示し、Y校の入学選抜と生徒層、学校生活の一日の流れ、授業と学力という3点をトピックとして取り上げ、フィールドノートやインタビューのデータなどを交えながらその概要を記述した。次に、Y校で実施したフィールド調査の概要を示した。

第5章では、不登校経験をもつ生徒たちがなぜY校に登校継続できているのかについてそのメカニズムを検討し、生じうる課題とともに提示した。

まず、不登校経験をもつ生徒たちのインタビューでの語りに注目し、不登校のきっかけとY校に通えている理由について、彼ら／彼女らの大多数が生徒間関係あるいは教師との関係といった学校内での対人関係を挙げていることを指摘した。次に、不登校経験をもつ生徒にとって友人や教師が登校継続を支える存在となるその背景として、①過去の学校経験による「痛み」を共有する生徒集団、②自閉症の生徒との共在、③密着型教師＝生徒関係による支援、④教師による生徒間関係のコーディネートという、4つの教育実践・背景要因を示した。ただし、不登校経験をもつ生徒の登校継続が主に対人関係によって支えられる一方で、卒業後の場における対人関係のあり方のギャップから、卒業生が早期離職・中退の危機にさらされる場合があるという課題も指摘した。

第6章では、Y校の生徒たちがなぜ教師の指導を受容するようになるのかについて、そのメカニズムを「志向性」の概念を基にしながらか検討し、生じうる課題とともに提示した。

まず、入学当初に教師の指導に反発心があったと明示的に語った生徒たちの語りに基づき、彼ら／彼女らが指導を受容するようになる契機が、彼ら／彼女らが有する①地位達成・学業達成に集約されない幅広い「成長志向」、②教師への「被承認志向」、③先輩をロールモデル化する「年長役割志向」のもとで生まれていることを見出した。そして、こうした指導の受容のメカニズムが、密着型教師＝生徒関係を意図的に形成していく教師たちの教育実践や、生徒を部活動へと巻き込もうとする教師の働きかけ、学校と家庭の協力体制などによって支えられていることを指摘した。

ただし、Y校における指導の受容のメカニズムと同時に生じていた、以下の2つの課題についても指摘した。1点目は、すべての生徒たちがY校の指導を受容するようになるわけではなく、学校の方針や指導に従うことを生徒ないし保護者が拒否し、学校を去っていくケースがあるということである。2点目は、Y校の生徒たちが、教師の指導を徐々に「全面的」に受容するようになり、教師の指導を相対化しその正当性について考える機会を失

っていき様子が見出せるということである。

第7章では、Y校の生徒たちが進路を決定して卒業していくメカニズムを、生徒たちの進路選択にまつわる語りにみられる「出来事」と「志向性」に着目しながら描き出し、留意点とともに提示した。

Y校の生徒たちの語りからは、学校内／学校外における出来事とそれに対する意味づけの連鎖のもとで「やりたいこと」が設定されていることがわかった。また、そうした出来事が、『楽しいことを仕事に』志向」「サポート志向」「年長役割志向」「成長志向」という4つの志向性との関連のもとで、生徒の「やりたいこと」の発見に結びついている様子も見出せた。また、これらの出来事と志向性に関する分析からは、さらに、Y校の生徒たちを進路決定へと水路づけるような教育実践・背景要因を見出すことができた。それらは大きく分けると、①特別活動や、専門コースの授業、進路行事・職業体験の機会などを充実させることによる、学校内の多彩な出来事の創出、②「やりたいことがある／やりたいことを探している」フリーターに会うような学校外の出来事（アルバイト、学校外の仲間集団との交流）の制御、という2点であった。

ただし、こうした生徒たちの進路決定のメカニズムを考えるうえで留意すべき点についても、2点言及した。1点目は、生徒たちのなかには、家庭の経済的事情、学力、高卒求人職種の偏り、本人の「適性」をふまえた教師の指導などによって、大きな制約を受けながら進路展望を描いていく必要がある者がいるということである。2点目は、Y校で形成した進路展望は、卒業後に会える学校外の出来事のもとで大きく揺らぐ可能性があるということである。

第8章では、近年のY校の卒業生たちがなぜ就業・就学を継続できているのかについて、そのメカニズムを卒業生たちの語りから検討するとともに、Y校の教育実践が卒業生の就業・就学継続を支えるうえでの限界と、教師が直面するジレンマについて指摘した。

離職・中退の危機を乗り越えた経験をもつ卒業生たちの語りからは、Y校での教師の話の内容や教師・友人とのつながりが、卒業生の就業・就学の継続を促すような「想起される学校経験」となりうるが見出せた。そして、それらの「想起される学校経験」によって就業・就学継続が促される背景として、①在学中の「辞めないための指導」と、②つながり続ける教師＝卒業生関係という2つの教育実践があることを指摘した。

しかし、離職・中退の原因のなかには、本人の意識のもちようのみでは解決できないものや、本人や教師が在学中には予期しえないものもあり、「想起される学校経験」では乗り越えがたい就業・就学継続の困難が少なからずあることもわかった。また、就職先・進学先への定着を促す「辞めないための指導」が、同時に離職・中退した者の社会的自立への困難にもつながりうるという、指導上のジレンマが生じていることも指摘した。

第9章では、本研究のこれまでの知見を改めて振り返り、それらの知見に基づく本研究の学問的意義・実践的意義、今後の研究課題と展望について記した。